
IS ~インフィニット・ストラトス~ Boys want to the Sky

屋根裏部屋の深海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス
Boys want
to the sky

【Nコード】

N0916BA

【作者名】

屋根裏部屋の深海

【あらすじ】

少年は空に魅せられ、空を目指した。その背に幾多の傷と「業」を背負って。少女は彼を見守り、支えた。それは彼と共にあるために。少年は未来を切り開くために、飛ぶ。これは、空を目指した少年と、彼を取り巻く人々の、「想い」の物語。

<warning!> 作者は投稿を始めたばかりの素人です。故に表現が未熟、不適切である可能性があります。誤字脱字なども含め、ご指摘をいただけたらうれしいです。また、オリキャラの登場によ

り原作の流れからは若干ずれることがあります。

プロローグ（前書き）

他の作者様の作品を読んでいるうちに構想が固まってきましたので投稿させていただきました。この作品は独自解釈とオリキャラの存在による改変、原作ヒロインとの恋愛要素を含んでいます。それでもよろしいという方はどうぞ。

プロローグ

覚えている限り、最初、自分の世界は真っ白だった。

白い服、ほとんど何も無い白い部屋、そして白衣の人間たち。

外に出れば電極を付けられ、注射をされ、食事をし。

そして、「実験」と「試験」をする、ただそれだけ。

そう、たったそれだけ。それだけが、毎日。

作文用紙の3行目くらいで終わりそうな、そんな毎日。

あのことがなければ、ずっと死ぬその日まで、同じだった
だろう。

あの日、初めて空を見た。

初めて、人の笑顔を見た。

初めて、鳥を見た。

川を見た。街を見た。木を見た。

初めて、世界が彩られた。

あの日、種が出来て。
種は芽吹いて、心となった。
悲しみを知った。痛みを知った。
その先の喜びを信じた。

僕は初めて、「人」になった。

今でも「俺」は空に憧れている。
空を飛んでいる。
いつか、その先にある未来を信じて。

1 出会いと再会と（前書き）

いきなり性格改変の嵐。でも驕りを無くしたセシリアは私の中では
こんな感じ。

1 出会いと再会と

「ふうん、ここがそうか。随分と金がかかってるな、IS学園ってのは」

IS学園正門に佇む影は一人ごちると、校舎を見上げた。
宇宙開発用マルチフォーム・スーツ、IS…正式名称を「インフ
イニット・ストラトス」

という、現在は「世界最強の兵器」と認知されている
それについての学舎であるIS学園。

それが、今行かんとしている目的地であった。

「…そーいや、あいつ大丈夫かな。つて、俺もか」

先日、世界に衝撃を与えたニュース。

そこで取り上げられていた友人を思いだし、ふと不安に駆られる。

『世界で唯一ISを使える男』と銘打たれていたニュース。

…しかし、それは表の話。

「…ま、顔なじみもいるんだ、なんとかなるだろう」

そう自分を奮い立たせ、彼はIS学園の校門をくぐった。

「それにしても驚いたよ。まさか紫電までここにいるなんてさ」
「まあ、俺の存在は極秘だったからな。下手に言いふらすなよ、一夏」

ホムルーム

HR前の少しの時間、俺、織斑一夏は偶然出会った知り合いと話をしていた。

あさみや してん

朝宮紫電。

俺の中学校からの友達であり、もう一人の男子。

聞いてみると、紫電は俺より早く適正があつたらしい。だが所謂「大人の事情」というやつで

極秘にされていたらしい。

ちなみに、藍越学園の試験会場と間違えてIS学園の会場に迷い込んでしまい、ISを起動させてしまったことについては爆笑された。…後で覚えてる。

「ま、これから長いつきあいになると思うがよろしくな、一夏」

「ああ、よろしく！」

とにかく、一人女子校で暮らす、なんていう事態が無くなったことに安堵しつつ、俺は席に戻るのだった。

「えっと、じゃあ次、あさ、みや、君：朝宮君、お願いします」

「はい」

この一年一組の副担任だという山田真耶先生に呼ばれ、立ち上がる。

ようやくだ。ようやく、ここに来られた。

万感の思いを込めて言葉を発する。

「朝宮紫電です。もう一人の男子ということで疑問に思っている人もいると思いますが、よろしくお願いします。」

当たり障りがなさすぎたか、不満げな空気。そんな中、誰かが手

を挙げた。

「質問です。ニュースで報道されたのは織斑くんだけでしたけど、なんでですか？」

「やっぱりきたか。」

「悪いけど詳しくは言えません。『大人の事情』とだけは言っておきます」

この答えに沈黙。ごめんなさい、言う訳にはいかないからと心中で謝る。

「はい。ISが動かせるって分かったときどう思いましたか？」

これは簡単だ。俺の根幹なのだから。

「色々思うことはあったけど、嬉しかったかな？『夢を叶えられる』って思った」

「じゃあ、朝宮君の夢って何ですか？」

「自由に空を飛ぶこと。今はISで宇宙まで到達すること！」

そう、あの日から俺の夢は変わらない。

あの、空を見た日から、ずっと。

一夏の紹介も無事終わり、全員が紹介を終えた後だった。

クラス担任である一夏の姉、織斑千冬さんが「げえっ、関羽！？」などと錯乱しきった言葉を吐いた一夏を出席簿で制裁した後、こんなことをおっしゃった。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。」

私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。

私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

こんな軍隊の挨拶のようなことを言われた直後、

「キャアー……！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけると嬉しいですよ！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

等々、e t c。なんだこれ、鼓膜が…あ、一夏も耳ふさいでる。

まあ、千冬先生（名字だと一夏と被るから）人気あるしなあ。…

これほどとは、誰も思わないだろうが。

歓声が洪水のごとく背中に押し寄せる。

「…毎年良くもこれだけバカ者が集まるものだな、感心させられる

…それとも私のクラスにだけ、集中させているのか？」

うんざりした表情の千冬先生だが、無理もない。

ついで言うと、後ろから「踏んで」「もっと叱って」「罵って

…時には優しくして」「でもつけあがらないように躡して」だの、

あきらかにまじい言動が聞こえるんだが。

一夏も同じだったのか、目が合うと肩を落とす。

…何というか、この子達の将来が不安です。

「…ちょっと、いいか」

一時間目の授業が終わり、休み時間。

一夏の知り合いらしい女子から声をかけられた。

「…篝？」

「………」

一夏、ちゃんと反応してやれ、かわいそうだ。

「屋上でいいか？…あなたも来てくれ」

「ん、分かった。ほら一夏、驚いてるのは分かるが早く」

「あ、ああ…」

どうにも歯切れの悪い友人をせき立て、廊下に出る。

しかし、どつかで聞いた名前と姿だな…？

一夏を連れ出したはいいものの、話を切り出せない。

逡巡していると、一夏の方から話を振ってきた。

「全国大会ぶりだな。元気にしてたか、篤？」

「……ああ」

去年の剣道の全国大会で、五年ぶりに一夏と私は再会した。

だが、私はその時一夏とまともに顔を合わせることが出来なかった。

決勝戦後、試合の興奮が冷め始めたとき、私は気づいてしまったのだ。

剣士として強敵と戦える喜びでもなく、少女として仲間の声援に応えたいという願いでもなくて、ただ私は憂さ晴らしのために

剣を振るい、暴力に酔っていたのだと。

愕然とした。

浅ましい自分の姿に。

人として恥ずべき行為だと思っていたことを、自分がしてしまっ

ていたことに。

自分の醜い本性に呆然としていたとき、男子の部の決勝開始のアナウンスが聞こえ、一方が懐かしい名前であったことに気づいた私は、白熱した声援とその名に呼び寄せられるかのように観客席に向かった。

五年の歳月が流れていても、分かった。
あそこにいるのは、あの頃共に切磋琢磨した、あの一夏なのだと。

昔と変わらないその強さを嬉しく思いながら、しかし私は心臓を鷲掴みにされたような気がした。

一夏の剣は、どこまでも真っ直ぐだ。

技の問題ではなく、あの頃目指していた、強い信念を秘めた剣士の姿が、そこにあった。

試合に勝利し、対戦相手と健闘を褒め称え合いながら握手を交わし、表彰台に立つ一夏。

その一夏の隣に立つことに強い罪悪感を感じ、私は一夏をまともに見られなかった。

結局その後、私は一夏とろくに言葉を交わすこともなく、別れた。その心に、切り裂かれたような傷を残して。

政府により強制的にIS学園に入学することになった私にある日、手紙が届いた。

差出人は、私の姉。

「篝ちゃんが思うことは分かる。でもね、篝ちゃん。それが分かっただなら、きつともっと強くなれる。その気持ちをお忘れしないで。あなたがこれから手に入れる力は、もっと恐ろしい力なんだから。でも、きつと篝ちゃんなら出来るよ。篝ちゃんのこととは私がよく知っているんだから」

どこから来たのかも分からない手紙。だけど、確かにその言葉は心に響いた。

本当はこうして向き合うだけでつらい。でも、向き合って初めて進めることもある。

そして、一夏の知り合いらしい、奇妙な男子。こちらについても聞きたいことはあった。

「人」であるはずなのに、どこか人からかけ離れた雰囲気を持つ「黄緑色」の髪を持ち、「漆黑」の瞳のこの男子は、何者なのか。

「ああ、思い出した！確か、全国大会の優勝者の篠ノ之篝さんだよね？」

「そういや紫電は会ったの初めてだったな。篝、こいつは中学からの友達の朝宮紫電。紫電には一度話したよな？俺の幼なじみで同門の篠ノ之篝だ」

「初めまして、篝さん。この朴念仁の友人の朝宮紫電です。よろしく！」

「おい待て、誰が朴念仁だ!？」

一夏の抗議は当然のごとくスルー。

「……よろしく。しかし、どうして名前で……?」

流してくれるかと思っただがそうもいかないらしい。まあ初対面で名前と呼ばれれば疑問にも思うか。

さてどうしたものかと考えていると、

「紫電はいわゆる帰国子女ってやつなんだよ。だからその名残というか癖というか、名前で呼ぶことが多いんだ」

一夏からのこの助け船に何とか納得してくれたらしく、追求はなかった。

(その勘の良さをなんで女子に発揮できないのかねえ……)

休み時間の終わりを告げる鐘を聞きつつ、俺は気づかれないように溜息をついた。

セシリア・オルコットは動揺していた。

3年前、列車事故で両親を亡くした自分に両親の「遺言」を伝えるに来た少年、いや少女だったのかもしれない。しかし、その子供と朝宮紫電と名乗った彼はあまりにも似ていたからだ。

あの遺言があつたからこそ、今こうして、私はここにいる。

オルコット家の遺産を守り、IS国家代表候補生として修練を積む日々。専用機を得ての主席入学。その影には、常に両親の遺言があつた。

きつと役に立つ、と言つて遺産の相続、管理についての法律をまとめてくれていた父。

オルコット家の女として、気高く生きなさいと立ち振る舞いを教えてくれた厳しくも優しい母。

一見仲の悪かった、しかし深く互いを愛していた二人に愛されていた、その事実が今の彼女の原動力となっていた。

誰よりも強く、気高く、美しく。言い寄ってくる男性達や親戚一同を袖にしながら、彼女は見事にオルコット家を守り抜いてみせた。

しかし、あの子供については、一切の手がかりはなかった。

会つて、一言礼を言いたくても、それは叶わなかった。

彼は、関係者なのだろうか。それとも、彼が本人なのだろうか？
答えのない問いを解決するために、セシリアは二人のいる席へ
向かった。

「ちょっと、よろしくって？」

「へ？」「ん？」

二時間目終了後、一夏の授業の復習を手伝っていたところに声。

顔を向けた時、自分のポーカーフェイスが崩れていないように願
った。

「確か、オルコットさんだっけ？俺か紫電に何か用？」

忘れもしない。

あの頃よりは大分大人びた、しかし幼さの残った顔立ち。

セシリア・オルコット。イギリスの代表候補生。

「あまりお時間は取らせませんわ。少し朝宮さんに聞きたいことが
ありますの」

「先ほど紫電さんはご家族について話されてはいませんでしたが、
ご兄弟とかはおらっしゃられないのですか？」

「…いや、いないよ。俺一人だけ」

隣から漏れてくる不機嫌なオーラを視線で抑えつつ、返答。

「…そうでしたか、申し訳ございません。以前、紫電さんによく似
た方とお会いしたことがありますので…」

「俺の知る限り、紫電はイギリスに行ったことはないはずだけど…
そんなそっくりだったのか？」

「……ええ、驚くほどに」

キーンコーンカーンコーン。

「…つかぬことをお聞きしましたわね。失礼いたしますわ。」
オルコットは優雅に一礼して席に戻った。

「…なんだったんだろうな」

「さあな」

暗に追及してくる一夏をいなし、俺も席に戻るのだった。

3時間目は千冬先生による実践で使用する装備の特性の説明だったのだが、その前にクラス代表を決めることになった。(ちなみに山田先生はなぜかペンとノート装備。あなたは教師のように…あれか、あなたも千冬さんのファンなのか?)

ちなみにクラス代表とは、クラス委員長を兼任し、クラス対抗戦での代表者、生徒会会議・委員会への出席が主な仕事となる。経験がものを言うISにとっては面倒ではあるが経験を積めるため有利といえる。

それはいいのだが…

「はい！織斑君をクラス代表に推薦します！」

「朝宮君がいいと思います！」

「私は織斑君を推薦します！」

等々。なんでオルコットをスルーして俺たちなんだ？代表候補生ですらないのに。

「では候補者は織斑一夏、朝宮紫電…他にはいないか。自薦他薦は問わんぞ」

「ちょ、ちょっとまった！俺はそんなのやらな」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権など無い。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「い、いやでも」

…面倒だからとっとと片づけようとしてませんか、千冬先生？

……ええい仕方がない。

「待ってください。それでは納得がいきませんわ」

俺が発言しようとする直前、落ち着いたソプラノボイスがざわめきを断ち切った。

「クラス代表とは文字通り、クラス全体を背負う方。決して物珍しさで決めていいものではありません。私も立候補させていただきませぬ」

オルコットに敵意とも言わうべき視線が突き刺さる中、俺は感心していた。

単なるお嬢様かと思っていたが、どうやら違ったようだ。

「織斑先生。ここは、模擬戦を行った上で決めるといっものはどうでしょう？それなら各人の実力も把握できるでしょう」

好機と見た俺は、提案を出した。

おそらく、これで結果が出れば、後腐れ無くやれるだろう。

「いいだろう。では、勝負は一週間後の月曜、第三アリーナで行う。各人、用意をしておくように。」

そう言った後、なぜか俺の方を見る先生。…なんか嫌な予感が。

「…と、言いたいところだが。オルコット、朝宮。お前達は今日の放課後すぐに行く。場所は第二アリーナだ」

「な、待ってください！そんな急に訓練用のISが使用できるのですか！？」

いくらIS学園とは言え、保有するISは46機、生徒が使用できるのは30機ほど。通常ならばかなり面倒な手続きを踏まなければならぬ。

が、どうやらこの問いを予測済みだったようだ。

「問題ない。すでにおまえの専用機が届いている。それを使えば問題あるまい」

この日、二番目に大きい驚愕の声が俺の耳を揺すぶった。

1 出会いと再会と（後書き）

というわけで次回はオリIS対ブルー・ティーズです。戦闘描写は初めてなので遅れるかも：ちなみにセシリアの性格改変の原因ですが、父親によるところが大きいです。

そんな悪い人に思えないんですよ、セシリアの父親。元が身分の低い家系、しかも婿入りってことで肩身狭かったんじゃないかなあ：なので死後もセシリアのためにと、気遣いをさせてみました。

束さんについては、臨海学校までお待ちを。

2 蒼の罇（前書き）

今回は戦闘回です。

2 蒼の零

時間は飛んで放課後。第二アリーナピットにて、ISスーツに着替えた紫電と制服姿の一夏、箒の三人が紫電の専用機を待っていた。「しかし、遅いな…一体、どうなっているんだ？」

「さっき聞いた話だと、コンテナに嚴重なプロテクトがかかっているらしくて先輩方や先生総出で解除をやっているらしいぞ？」

（十中八九、あの人の仕業だな…）

年中ウサ耳にワンピースという格好の人物がモニターを前に高笑いしている様子を幻視した紫電はむしろ落ち着いたものだった。

「まあ、慌てても仕方あるまいよ。いざとなりや訓練用のラファールを貸してもらおうさ」

ラファール・リヴァイブ。

第二代型IS最後の機体でありながら、その優れた操作性と膨大な拡張領域バスターレットにより、多彩な後付武装イコライザーを有する、戦闘距離を選ばない汎用性を備えた最も完成された機体。その優秀さはもつとも後発にもかかわらず世界第三位のシェアを占めていると言つ事実が全てを語ってくれるだろう。

「とはいえ、やはり専用機との性能差は否めんだろう？」

「まあな…相手の得意距離は中距離から遠距離、リヴァイブが飛び込むには若干機動性が足りないし得意距離もほぼ同じだ。パイルバンカーでもあれば別なんだがな」

「……物騒だなオイ」
グレー・スケール
灰色の鱗殻。

リボルバー式弾倉の採用により連射が可能になった、リヴァイブ最強の武装と言っても過言ではないパイルバンカー。小型故威力は若干他のパイルバンカーに比べ低いものの、それを生かしシールド

の裏に隠すことも可能なリヴァイブの特性によく合っている武装。別名「盾殺し（シールド・ピアス）」。

…ただ、一般生徒用のリヴァイブに搭載されているかははなはだ疑問なところである。食らえば並のISなら吹き飛ばすからだ。

と、そこにアナウンスが入る。

『朝宮君、朝宮君ー！』

「先生、まずは落ち着いて。はい深呼吸」

『は、はい…すうー』

「そこで丹田に力を込めて前方に掌底を！」

『はっ！つて丹田ってどこですか！？』

「言ったらセクハラなんで嫌です」

『え、えええ〜！？』

『何を遊んでいる』

「うわあ、六天魔王！？」

いきなり空間ディスプレイが展開し、千冬が話し始めた。

『誰が信長だ、馬鹿者。朝宮、プロテクトが解けた。中身は搬入口にある、すぐに準備しろ。時間がない』

「ようやくですか…！！」

急ぎ、ピットの搬入口に向かう。そして、俺の『専用機』を見た。

「…………紫電？」

一夏が心配したような声をかけてきた。そんなひどい顔してるのか、俺は。

装甲に少し映った自分の顔を見る。乾いた笑みを浮かべた顔。ああ、確かにひどいな。

「…………ははっ。もう、逃げるなってか？」

つぶやいて、静かに装甲に手を触れる。ずっと目を背けたかった、

『そいつ』がそこにあつた。

大型のスラスタを搭載した、背部に曲線を描いて伸びる一対のウイングバインダー。

軽装の全身鎧を思わせる上半身。鋭さを感じさせる無骨な腕部。安定性を重視し、広い足底の脚部。ふくらはぎのあたりにはスラスタ。

暗いモスグリーンの装甲にくすんだ黄色のライン。

「……まったく、あの人はろくなことをしないな。こんなものを、わざわざ送ってくるかね」

罪。それは、俺の罪の証。

「…分かったよ。なら、俺はもう『逃げない』」

そして、背負うべき「業」（カルマ）。

「全部背負って、『生きる』」

背中を預けた瞬間、一気に装甲が稼働、各部に装着される。

ハイパーセンサーが起動し、感覚世界が爆発的に拡大していく。慣れ親しんだ、懐かしい感覚。

診断プログラムを起動。異常なし、オールグリーン。

『大丈夫。きつと、デンくんならできるよ。私たちがついてるんだから！』

あの人の声が、聞こえた。

「いけるか、朝宮？」

目を開けてみれば、モニター越しなのにどこか不安げな千冬先生、一夏、篝さん。

軽く動いて見せ、サムズアップ。

「…ふ、いけるようだな。試合までもう時間がない、フィッティングは戦闘中に行え。……行って来い、『紫電』」

「了解……！」

普通なら無体な、と思うだろう。

だけど、なぜか、今なら。今なら、どこまでもいけそうな気がする。

目指した、あの空へ。

「……行って来い、紫電！」

心の通った友人には激励を。

「あなたの力、見せてもらうぞ」

あの人の妹には期待を。

そして、あの人には最高の相棒を。

カタパルトによって加速した機体が射出される。

『ようやく、来ましたわね』

「失礼、連れがなかなか家から出してもらえなくて難儀していてね。まあ、待たせた分はしっかりと返させてもらう」

『……余裕があまりのようですね』

<warning・ブルー・ティアーズ、射撃態勢に移行。全システム、戦闘状態に移行>

スナイパーライフルをオルコットが構える。

俺は一覧から初期装備のアサルトライフルを選択。右手に粒子が集まり、実体化する。

「オルコット！一つだけ頼みがある」

「なんですの？まさかこの期に及んで怖じ気づきましたか？」

「まさか。何、『亡き王女のためのパヴァーヌ』をお願いしようと思っただけ」

『…どういふことですか？』

「踊る輪舞曲ワルツくらいは、決めさせてくれてことさ！」

「ふふっ…ええ、よろしくてよ。ただし、ダンサーはあなたですわ」

『そのくらい分かっている！遅刻のお詫びだ！』

ブルー・ティアーズの『スターライトmk?』が火を吹き、それを紫電が回避する。

しかし、紫電は攻撃を仕掛けない。ひたすら、ターンや急なカットを行いかわすだけ。

流れるように、揺らめく塵気楼のように。
あるいは、風に舞う鳥のように。

誰かがダンスのようだ、といった。
タクトを振りかざす指揮者とオーケストラ。
奏でられるメロディーに乗って、ダンサーは踊る。

それは、白昼夢のようだった。

「…さて、そろそろ始めなくては。いい加減、先生方が焦れている
だろうからな」

『ふふ、楽しい時間でしたわ。では、改めて』

いままではただのお遊び。本番はここから。

お互い、同じ高度になり、向かい合う。

「ここからが、勝負だ！」

『もう少し付き合っていたくださるわよ！私とブルー・ティアーズ
の輪舞曲に！』

ブルー・ティアーズの最大の特徴、思念誘導攻撃ユニット「ブルー・ティアーズ」。

その4機が一斉に襲いかかり、縦横無尽にビームを放つ。

しかし、俺はターンや急制動を駆使して回避、攻撃角が地表と直角でなくなった瞬間を突き、PICを停止。

自由落下からPICを再起動、地表付近を飛ぶ。

分離したBTユニットからも攻撃がくるが追いついてきたところで急制動、バックブースト。

動きが一瞬止まったユニットを撃ち抜く。

『あっ……！？』

「この程度で引つかかるなよ、誘導兵器はデリケートなんだからな」

「すげえ……ISであんな動きができるのかよ!?!」

「…本当にあいつはIS初心者なのか?動きが尋常じゃないぞ」

「すごい……完全にBT兵器の特性を見抜いてる……!」

「BT兵器は多角的な攻撃を可能にする反面、制御が難しく、一瞬でも迷いが起きれば動きが止まる…地上戦は下からの攻撃という選択を潰すためか。味な真似をする…」

「…うーん、それだけではないみたいですね」

「…?どういうことだ、山田先生?」

「さつきから紫電君のISをモニターしてるんですが、射撃管制ソフトが反応についていけないんです。だから、紫電君はノーロックでライフルを撃っているみたいなんです」

「何だと……!?!」

山田は手元のコンソールを操作し、いくつかのデータを呼び出した。

紫電の射撃のシーンを巻き戻して連続再生し、同時に紫電のISのデータを表示する。

「この通り、あの機体の射撃管制ソフトでは追いつかないスピードで射撃が行われているんです。さらに言えば、オルコットさんのISはロックオンアラートを出していません。おそらく、ノーロックで射撃を行うため、より機体が安定する地上戦を選んだのではないのでしょうか?」

「信じられんな…ハイパーセンサーがあるとはいえ、ノータイム射撃を肉眼で行うか…山田君、君はできそうか?」

「……ノーロック、ノータイムでこれだけ正確な射撃は厳しいですね。すごいですよ、紫電君は。…怖いほどに」

「くっ……!!」

『2機目。パターンが見えてるぞ?』

私は焦っていました。

今し方2機目のブルー・ティアーズが撃墜され、こちらにまで攻撃が及びました。

セオリー通りなら私の方が有利な展開。しかしフタを開けてみれば紫電さんは一発も直撃を許さず、逆に私の方は既にかんりのエネルギーを消耗。さらにブルー・ティアーズを2機失っています。

…近接戦闘を仕掛ければ変わるのかもしれませんが、あいにくブルー・ティアーズは遠距離仕様のIS、近接戦闘は自殺行為。

「切り札」はあるにはありますが、最後まで見せるわけにはいきません。

(考えなさい、セシリア・オルコット…!)

パターンを読まれているなら、新たなパターンを考えればいい。

かわされるのなら、道をふさいでしまえばいい。

近接戦闘を仕掛けられないなら、遠距離で削りきればいい。

「だからといって、負ける気はさらさらありませんわ!」

足掻け。その矢を届かせるために。

(…誘導されてるな。やれやれ、火をつけちゃったかな)
内心少し後悔しつつ、BTユニットの攻撃をかわす。
先ほどとは違い、回避方向を限定するような十字砲火。そして、
間髪入れずに来る狙撃。

BTユニットを攻撃しようとするればそうはさせじとライフルが、
本体に攻撃しようとするればユニットからの攻撃が阻む。
このままでは、ジリ貧になるのは確実だった。

(突撃するのも手なんだが…狙ってるのはそこだろうな)
おそらく、俺が勝負に出て突撃するのを待ち受けているのだろう。
ということは、なにかしら隠し球があるということ。
おそらく、まだ射撃武器があるのだろう。

「だけど、前に出るしかないなら…行くしか、ないよなッ！」
スラスターを全開、中距離に踏み込む。迎撃をかわし、円周運動
を開始。

さあ、根比べだ。

BTユニットからの攻撃で照準がずれたアサルトライフルからの
火線がブルー・ティアーズを掠める。BTエネルギーの高出力ビ
ームが一秒前紫電がいたところを貫く。

先ほどから二機の戦闘は完全な消耗戦に突入していた。

「くそっ、あのままじゃ紫電が不利だ！」

「おまけにまだBTユニットは二機健在…あれではシールドエネ
ルギーを削りきる前に残弾が切れてしまう…！」

ビーム系兵器の最大の利点、それはエネルギーが切れなければ実質残弾は無限ということが、ここにきて効いてきた。

アサルトライフルも弾数は多い方だけど、長期戦でもうほとんど残弾がない。弾が無くなればいやでも接近戦しか手がない。

「誘いに乗るしかないのかよ…!?!」

向こうの狙いは明白。おそらく接近戦を仕掛けた瞬間に全力で攻撃するつもりだ。

紫電も接近せずに倒すために、あえて撃ち合いを選んだんだろう。

ただ、結果としてそれは紫電に不利に働いている。

好機で常に「ブルー・ティアーズ」からの妨害が入るのだ。

結果として、紫電のシールドエネルギーは徐々に削られている。

「紫電……!」

ディスプレイでは、また紫電が射撃を妨害されたところだった。

(…まいったな。詰みかけてる)

状況は完全にオルコット有利だった。

こっちは残弾はあとわずか。シールドエネルギーも削られている。対してオルコットは残弾の心配をする必要もなく、エネルギーもまだ俺よりは余裕がある。

仕掛けるなら、もう時間はない。

なら、今仕掛ける………！

（機を逃して削り殺されるよりましだッ！）

もう一度、スラスターを全開へ。上下左右へ立体軌道を行いながら突進する。

畏だろつが構うものか。もう、この瞬間にしか機は無いのだから。

（そう来ると思ってたわ………っ！）

内心で歓喜しつつ、冷静に狙いを定める。あの方のこと、おそろくただではすみませんわ。

ならば、この一撃で終わらせるしかありません！

残ったティアーズとライフルで牽制しつつ、射程内に入ってくるのを待ちます。

（焦ってはダメ、確実に撃墜できる距離まで待たなければ………！）

ここで、墜ちていただきますわ！

（仕掛けてこない………やっぱり、接近狙いか！）

かなり距離を詰めてきたがまだオルコットは牽制しかしてこない。思った通り、懐に入ろうとする隙を突く気だ。

なら、まだ望みはある！

ついにオルコットが動いた。

腰部にあった、今まで隠されていたユニットが起動する。

「残念ですが、ブルー・ティアーズは6機ありましてよ！終わりですわ！」

「はっ、冗談……！」

残弾の切れたライフルを投げつけ、発射されたミサイルの内一つを防ぐと同時に、実体化した「最後の手」を投げる。

「お前も、道連れだ……！」

その後、すぐさま放たれていたブルー・ティアーズの一斉砲撃をかわせるはずもなく。

そのまま、青の光に飲み込まれた。

2 蒼の罫（後書き）

終わらせるはずだったのにずれてしまった…
もう少しおつきあいください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0916ba/>

IS ~インフィニット・ストラトス~ Boys want to the Sky

2012年1月5日00時52分発行